



炬火を掲げていざ謳う

No.45



# 我々の泉鳥取

2023年 6月 6日(火)

編集 泉鳥取高等学校閉校記念事業実行委員会

大阪府阪南市緑ヶ丘1-1-10

<https://www.osaka-c.ed.jp/custom91.html>

施設秘話(4)

## 学 年 職 員 室

— 生徒と教職員の距離を縮める役割 —

「我々の泉鳥取」No.21で進路指導室の移動の話を書きましたが、その時に触れられなかった「学年職員室」について振り返ります。

もともと泉鳥取高校には学年職員室はなく、2階・3階の1スパンの小部屋は生活指導室、4階の小部屋は進学資料室として使われていました。平成15(2003)年、進路指導室と生活指導室を整理し、学年職員室を設置しました。当時の思いを、30周年記念誌、27期学年主任だった平野芳夫先生の文章を参考に振り返りましょう。

**我々の学年で沸き起こった一つの指導法として、学年職員室を活用した指導でした。**

現在において、これは決して新しい取組みでもユニークな取組みでもありません。子どもたちはさまざまなストレスを抱えて登校しています。落ち着いた状態で、じっくり話し合える空間がどうしても必要であったわけです。空き部屋を利用して始まった学年職員室での様々な指導は、現在、全学年で行われています。(創立30周年記念誌 平野芳夫氏の文章より)

1期から20期頃までの泉鳥取高校は、大職員室に生徒が三々五々訪れ、また教員が生徒を導いて、話し込んでいる状態がありました。ところが、個人情報等の問題もあり、大職員室に生徒を連れてきて話をするのがしづらくなり、さらに生徒と教職員の距離が次第に広がり、そのことが生徒理解をしづらくする状況を作り出していました。

学級数が減少し、教室に余裕が出てきた段階で、進路指導室を拡張・移動させるとともに、学年の職員室を作ったことが、その後の生徒指導に大きな役割を果たすことになりました。きめ細かい話し込みが行われ、荒れた状態だった学校が次第に落ち着きを取り戻していったのです。

27期生の時代は、生徒との話し込みがとりわけ尊重され、さらに農園も作られました。泉鳥取高校に

とって、新たなムーブメントが起きた時期ということになります。

今も学年職員室は、人間関係のトラブルの相談や聞き取り、遅刻指導や生徒指導、障がいや疾病のある生徒の合理的配慮等、様々な事象に対応し、生徒とのコミュニケーションの最前線として機能しています。



◀学年職員室の内部  
通常教室の半分の面積です。

学年職員室の入り口 ▶

行事予定等が見えるようになっています。

